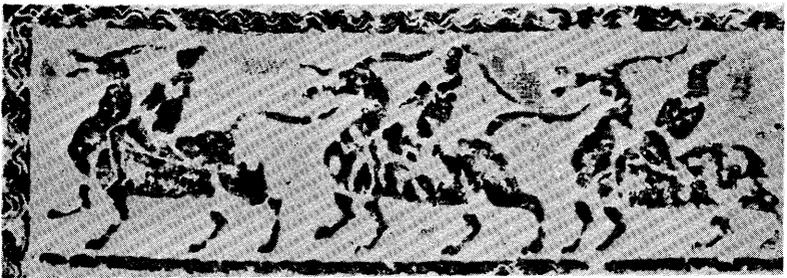


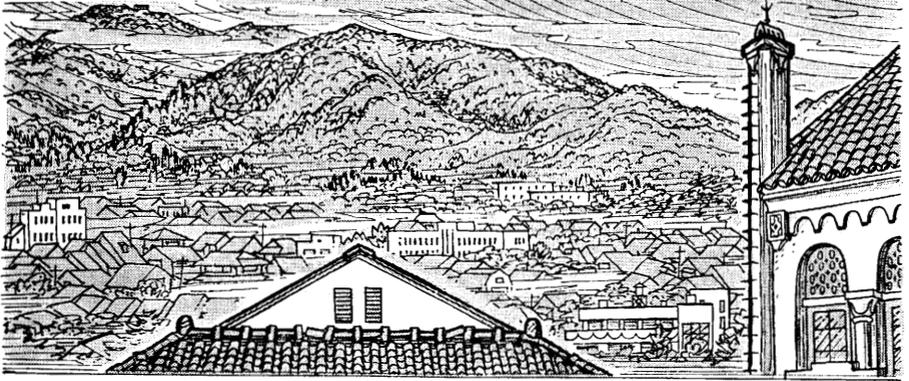
第二九号



1984

京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X



## 人 文 第二九号

1983年6月—1983年11月

### も く じ

随想	谷 心	上山 春平	2
	去年の夏のこと	林 巴奈夫	
	戊辰戦争従軍の庶民	飛鳥井雅道	
講 演			7
夏期講座			
	中世ヨーロッパと地中海世界	基野 尚志	
	儀礼と象徴	井狩 弥介	
	土の伝統と木の伝統	田中 淡	
	二つのユートピア	小野 和子	
	出版文化の可能性	ピーター・コーニッキー	
	シベリアの旅	吉田 光邦	
開所記念講演			
	黒船再考	園田 英弘	
	国共合作の崩壊と汪精衛	狭間 直樹	
	イエスにおける二つの死	谷 泰	19
本のうわさ			
	川勝義雄『六朝貴族制社会の研究』(山下・上田篤・多田道太郎・中岡義介『空間の原型』(赤松)・荒井健『秋風鬼雨』(宇佐美) Peter F. Kornicki『The Reform of Fiction in Meiji Japan』(久保)		24
共同研究の話題			
	強靱なる体力と好奇心(一九世紀日	白幡洋三郎	
	本の情報と社会変動班)		
	慈恵伝とウイグル仏教(行歴僧伝に	森安 孝夫	
	みえる中央アジアとインド班)		
	空間の世紀(十八世紀ヨーロッパの		
	空間認識班)	樋口 謙一	27
旅			
	高昌故城にて	杉山 正明	
	パリの屋根裏部屋	岩熊 幸男	
書いたもの一覽			33
	人のうごき(23) 東洋学文献センター講習会(29) 受賞・外国人特別招聘教授・招聘外国人学者・外国人研修員(30) お客さま(31) 講演(32)		

## 谷 心

上 山 春 平

いつのころからか、書道をたしなむ人たちが、本館の図書室で、定例の集りをもっている、ということはきいていた。つい先日、そのグループの一人から、近く作品展をしたいので、出品してもらえないか、というさそいをうけた。

当方は、性来の悪筆のうえに、全く書道のたしなみがないので、おことわりしたのだが、是非に、ということなので、一応承諾した形になってしまった。

さて、何を書いたものか、と考えあぐんでいるうちに、ふと思いついたのが、「谷心」の二字だった。

はじめは、かねてから好きな老子のことば、「谷神不死。是謂玄牝。」にしようか、と思ったのだが、これだけの数の文字を、付焼刃でこなすのは大変なので、できるだけ文字の数をへらし、それも、できるだけ画数のすくないのにしよう、ということだ。「谷心」に落ちついたのだ。

「谷心」という熟語は、老子にはない。次のような老子のことばに表わされている思いを、私が仮に「谷心」とよんでみたにすぎない。



知其雄。守其雌。爲天下谿。

爲天下谿。常德不離。復歸於嬰兒。

その雄を知りて、その雌を守れば、天下の谿となる。

天下の谿となれば、常德離れず、嬰兒に復歸す。

文中の「雄」と「雌」とは、積極性・能動性と消極性・受動性の象徴と解してよからう。積極性をたっぷり身につけた上で、消極性に徹すれば、「天下の谿」となる、というのだ。

老子が谷（谿）に託した思いは、「谷神、死せず。これを玄牝の門、これを天地の根という。綿綿として存するがごとく、これを用いて勤れず。」ということばに盡くされている。

中国には、古来、泰山や五岳の信仰があり、皇帝たちは、泰山の上に壇をさきずいて天を祭った。

山が天につながるのに対して、谷は海につながる。老子に、「江海の能く百谷に王たる所以のものは、その善くこれに下るの故に能く百谷の王たり」とある。

私は、永年、日本文化の特質を、「谷」のイメージでとらえようとしてきたのだが、それは、私自身の「かくありたし」という願望の投影でもあった。



## 去年の夏のこと

林 巳奈夫

何といふ虫か知らない。梅雨明けの頃からしばらくの間、夕方から日没後にかけての時間だ、気持よい風が吹き渡ると、それに合せて何匹かが木立の中で一齐にチ……と大きな声で鳴き出す。桃の熟してくる時分である。小学生の頃住んでゐた貸家の庭に、桃の木が二三本植つてゐた。かけた袋の口のあいている下から、丁度食べ頃になつた桃の、花落ちの一番美しい所がよく虫にかぢられてゐた。暗くなつた庭であの虫が鳴くと、あいつが桃を食べるのだよ、とお袋が言つた。桃をかぢるといふこの鳴き声の主が、一体どんな奴なのか、その頃から一度確かめたいと思ひながら、ついぞ見かけたためしがない。

研究所分館の檜の木の生垣で毎年この虫が鳴く。考古学研究室から東の芝生に下りて、そつと声のする方に近づいてみるのだが、或る距離まで近づいた所でびたつと鳴き止んでしまふ。人の気配を感じるらしい。去年の夏、芝生の東の生垣でこの鳴き声の方に、そつと歩いてゆくと、風向の加減か、手のとどきさうな所まで近づいても鳴き止まない。生垣の中をのぞきこんでゐる内に一度鳴き止む。暫く待つと、少し移動したらしく三〜四センチ左手の方で鳴き出した。立ち止つたまま少し身体をねぢつて薄暗い木の茂みの中をのぞくと、居た。くつわ虫に似た



形の大きな奴で、全体が薄緑、円味のある羽根をふるはせてチ……といつまでも鳴きつづけてゐた。意外とやさしい姿の虫だ。お袋の言つてたのはこの虫のことだつたのか。半世紀近くの懸案がやつと解けた。といふのが去年の夏の大収穫。

ところでかういふものを読まされて、『人文』など税金の無駄使い、いい加減に廃刊にしまへ、とお思ひになりませんか。

## 戊辰戦争従軍の庶民

飛鳥井 雅道

明治維新が絶対主義の成立なのか、ブルジョア革命なのか、という論争は、この数十ヶ年、維新研究が具体化して以来、延々とくりかえされてきたし、本研究所の諸先輩が、この論争で大いに活躍されたことは、いまさらいうまでもあるまい。しかし、わたしは、今、こうした定義づけよりもより興味ある「事実」が、一見小さいがもっと注目されてもよいと思つてゐる。

維新は、必然的に内乱をとまなわずには達成されなかった。一年以上にわたる内乱をへてやっと新政府は自らの基盤をうちたてることができた。そのこと自体が維新の性格を語っていると、わたしは思うが、わたしの関心は、その政治過程だけでなく、戦闘に参加していった庶民身分の兵士たちの心情の変化と運命により強くおかれてきている。



薩摩からの一私隊の記録は、早く出版され、また丹波山国隊については、千ページをこす本となつて一九六六年に非売品ながらも刊行された（水口民次郎『丹波山国隊史』山国護国神社）。この本には明治三九年の永井登（道雄氏の祖父）の「丹波山国隊誌」が付されていて便利だが、わたしは今少し、庶民的な生まのデータ・記録を読みたかった。長州奇兵隊の武広遊が記した『戊辰戦争従軍日記』が一九七八年にビッグフォ―出版から活字になったのも嬉しいが、最近、やっと、現在の川西市と兵庫県川辺郡猪名川町にまたがる、多田神社の「御家人」たちが結成した「多田隊」の記録を見る機会に恵まれて、『復古記』などとてらしあわせながら考えている。

多田隊の人々は「御家人」と自称するものの身分保証はなく、中流の百姓だった。彼らの何人かが残した道中日誌、雑記帳をみても、彼らは費用自弁で遠征し、戦闘している。なぜか、がまず問題だろう。新政府への期待というより、百姓が「御家人」としての保証を勝ちとるための志願兵だったかも知れない。記録は多く断片的で、分析は今後の機会に譲りたいが、復員後、彼らは新政府から一部の人に「無禄士族」の称号をあたえられただけだった。

隊士たちは、くりかえし新政府に、多田隊の貢献を認めよと要求しているが、無駄だったらしい。明治三〇年代になつても旧隊士は連署して請願書を内閣総理大臣あてに提出した。政府の態度がどうだったのかは、今調べている最中だが、おそらくこれにも返事はこなかったのではないか。にもかかわらず、隊士たちの「戊辰」年のメモは面白い。民衆の維新史を考えたいわたしの中間報告である。



## 講演



夏期講座（一九八三年度）

△異文化接触の諸相▽

八三年八月一、二、三日  
於本館大会議室

### 中世ヨーロッパと地中海世界

甚野尚志

講演では、中世ヨーロッパと地中海世界のかかわりの問題を、「十二世紀ルネサンス」とよばれるヨーロッパでの文化的復興運動のコンテキストの中で考えてみようとした。

一般にヨーロッパ社会は、十二世紀にその固有の制

度や文化的伝統を形成したといわれる。つまり、気候の温暖化とそれにもとづく農業生産の向上、商業の復活といった現象が、さらにこの時代に、都市のコミュニケーション運動と中世都市の形成、王権の強大化と封建王政の確立という基本的制度の構築を促したのである。このような社会状況の変化に支えられて、シャルトルやパリなどではラテン古典の研究が再開され、ポロニヤではローマ法についての議論が聞かれるようになる。また、これと同時に、スペインやシチリアでは進んだ科学的知識を吸収するために、ギリシア語及びアラビア語の文献の翻訳活動が大規模に行われた。

この中で特にシャルトルは、十二世紀を代表する知識人たちが集まった場所であった。彼らシャルトル学派とよばれる知識人の知の特色は、そのネオプラトニズムの性格にあるといえる。彼らは「存在の大きい連鎖」として世界をとらえ、人間や国家をマイクロコスモスとみなす。そのメタフォリックな世界認識は、のちに中世思想の正統となるトミスムのメトニミックな戦略とは相反するものであった。

この十二世紀の知識人たちが分けていた知のネオプラトニズムの性格は、ラテン世界で伝えられた文献によるところも大きい。それが同時に当時の活発な地中海商業によってもたらされたギリシア語及び

アラビア文献の影響力が考えられねばならない。それらの文献の中には占星術や錬金術といったネオプラトニズム的な文献が多くあり、当時の知識人たちはこのような文献を求めて、自らトレドやパレルモといった翻訳活動の中心地へおもむいている。

十三世紀以降の知の形態が、体系性と厳格さを伴ったスコラ哲学の正統的伝統をになつたとすれば、十二世紀の知は、部分的分析よりも全体的直感を重視するものであり、これを地中海的知とよぶこともあながち不当ではないだろう。

## 儀礼と象徴

——古代インドの祭式世界——

井狩 弥介

インド最古の文献群である「ヴェーダ」(紀元前十二世紀—同六世紀)は、古代インドの多彩な祭式儀礼の世界をその主題とする儀礼書の体系である。侵入民族であるアーリア人の文化の中核にあった儀礼の体系は、先住民の土着文化との摂取・融合の過程を重ねつつインド世界の枠組を形成していった。

講演では、このヴェーダ祭式儀礼のうち特に権威の高いシュラウタ莊重祭式の体系に話を限定し、思想形成の基盤となっている祭式そのものの実際を具体的に例示しながら、インド思想の初期の流れを紹介した。

ヴェーダ祭式の基本的形式とは、神々のために聖なる祭火に供物を投じ、その恩恵を求めるものである。祭式行為の単位は、祭官の一定の行作とこれにともなう一定の定句の誦唱からなる。祭式で唱えられる定句(神々への讃歌、呪句など)をマントラと称するが、このマントラは文体・内容の分析から二つの型に還元できる。ひとつは、神々を祭場に招請し称讃の限りを尽くして礼遇する、修辭の多い韻文を主とするもの、他は、祭場で扱われる祭具などを神々や超自然的な諸力と結びつける、多くは等置文の形式をとる散文マントラである。これらは祭官グループの役割分担によって祭式の場面に配分される。前者を賓客歓待型、後者を呪法型と仮に名づける。ヴェーダ祭式で両者は併用されるのが常であるが、両者の間の比重の置かれ方に若干の歴史的な変遷がみられるものの如くで、時代がさがるにつれて、呪法型を用いる部分に祭式全体の重点が置かれてゆく傾向がみられる。祭官は、祭場の具体的な構成要素と自然・宇宙の諸力との神秘的対応関

係を知って、祭式シンボルの操作もおこない、超自然的な力をコントロールしようといった思考様式が支配的になってゆくのである。祭式次元の存在は宇宙存在の写像であるとの認識が確立すると、両次元の要素間の対応において、前者は後者の象徴とされ、この象徴・象徴関係の認識への追求が祭官の関心の中心を占めるに至る。さらに、祭式解釈の展開は、祭式執行が宇宙の再創造・再生をおこなうものとの観方を加え、祭式事象と宇宙事象との対応に加えて、祭式によって自らの宇宙的な新生をはかる祭式当事者の個体そのものとの対応の思考が登場する。かくして、祭式を媒介として、世界（大宇宙）と人間（小宇宙）の対応という思考枠組が成立する。この象徴思考にもとづく神秘哲学は後代のインド思想の大きな潮流のひとつを形成することになる。また、祭式において宇宙の超自然力のコントロールを可能ならしめたマントラの「ことば」のもつ神秘力への信念は祭式家にとって当然の前提であったが、この問題は後代に祭式の具体的コンテクストを離れて、「ことば」が果してもののリアリティにふれるか否かという論争を生みだす伏線となっている。

## 土の伝統と木の伝統

——中国建築の形成——

田 中 淡

中国の建築は、三千年以上に及ぶ連続的な歴史のなかで特色ある伝統を形成したが、そこには時代を超えたいくつかの原則を指摘することができる。例えば、中軸線上に左右対称の中庭群を構成する平面配置の原則は、西周初期の宗廟址から近代の四合院住宅にいたるまでうけつがれている。構造は、墓などを除いて木造を基本とし、屋根・軸部・基壇の三つの部分によって形成され、その構架は間架・挙折という構成によって実現される。木造建築の三つの部分という概念は、北宋の喻皓の『木経』に上分・中分・下分として現われている。この「分」は、その技術的伝統を引く北宋末の官撰建築書『营造法式』においては、より細分化した寸法計算に採用されるころの独特な比例標準單位である。構架の規模は、正面の柱間数をしめす「間」と、奥行方向の梁組みを組み重ねるジョイントの数をしめす「架」とによって表現される。『营造法

式』の冒頭部分に、施工に先立って、側壁に縮尺一〇分の一の断面図を描くことをのべているように、「間架」による構架は、屋根面に反りをもたせる「挙折」の手法と一体となって、同じ構架の単位を柱列ごとにくり返すのを原則としている。現存する晩唐以降の木造建築遺構はすべてこの原則に従っており、間架は唐代以降徴税の算定基準に用いられるほど普遍的な概念であった。『爾雅』に見える垂木の名称や『儀礼』にいう母屋桁の名称を、それぞれ晋の郭璞や後漢の鄭玄は「五架屋」をもって解釈したが、その伝統がさらにさかのぼることが、西周初期の三間五架の宗廟址の発掘によって明らかになった。これは、殷代以前の分厚い土壁を構造体とする構架から、後世のいわゆる「屋倒るとも墻場ちぢず」のカーテンウォールへ移行する過渡的な時期を示唆する。一方において、『礼記』に「高きを以って尊しと為す」と、天子・士・大夫に等差をつけられたところの、「堂」すなわちその基壇の高さを重視する伝統は、春秋戦国時代に盛行した高層建築「台榭」に顕著であり、前漢長安城南郊の礼制建築遺址などにまでうけつがれている。『史記』によれば、前漢の武帝の宮殿に「神明台」と「井幹楼」があり、土を主構造とする台榭と木を主構造とする楼閣が併存したことを伝える。後者の源流は、遠く新石器時代の

浙江省河姆渡の高床建築遺址にまでさかのぼるものであろう。土の伝統と木の伝統の融合は、武帝の台・楼に顕著であるばかりでなく、今日に伝わる故宮太和殿の異様に高大な三重基壇や、ストゥールパを祖形としながら楼閣式になる応県木塔などにも、それぞれ両者の残影がみとめられるのではなからうか。

## 二つのユートピア

小野 和子

清朝の考証学者李汝珍が、小説『鏡花縁』を書いたのは、アヘン戦争より凡そ二十年前のことであった。小説の背景になっているのは、則天武后、すなわち中国唯一の女帝の時代である。小説は、二つの部分に截然と分かれ、前半は、ヒロインの父唐敖が、船に乗って海外に君子国、黒鹵国、女兒国など未知の国々を訪ねて歩く物語である。トーマス・モアの『ユートピア』やスウィフトの『ガリバー旅行記』と全く同じ趣向であって、作者はこのような海を越えた彼方に空想の国々を設定することによって、中国という現実世界からの自由を獲得したのである。君子国を訪れた唐敖は、

天朝（中国）で行なわれていると聞くてん足は何と野蛮な習俗か、或いは結婚の相性をうらなう算命はいかに不合理なものかと批判される。黒蘭園を訪れると今度は学塾の黒人女学生が、堂々たる音韻論を展開して、彼ら女を圧倒してしまう。さらに女の国にまで来ると、遂に男と女の役割が逆転して、男が「内」に家政をつかさどり、女が「外」に社会をつかさどる、というわけである。作者は、これらの国々において伝統的な固定観念とは異なった女性をみ、あるいは男女の関係をひっくり返してみせることによって中国の現実を諷刺し批判したのである。この小説に登場する国名は、既に『山海経』にみえるものだが、彼はこれを自在な空想力で以てふくらませた。それは一見、考証学の実証主義と正反対のものにみえようが、既成の価値を疑うてかかろうとする旺盛な批判精神とするどい合理主義的立場は、まさしく考証学者のものであって、この小説は考証学者の書いた空想小説にはかならなかつた。

一方、康有為の『大同書』は、アヘン戦争以後、「異文化との接触」が始まり、西洋の新思想が滔々と流入するなかで書かれた壮大なユートピア世界であった。彼は中国の伝統的な学問——とくに公羊学——や仏教、ルソーの天賦人權説、フランス革命の自由、平等、博愛、進化論等々、ありとあらゆるものを己れの

内にとりこんで、全地球的な規模でのユートピアを構想したのである。その中心的なテーマとして設定したのが、これ亦女性の解放と家族の解体であって、この部分は、書物全体の三分の一を占める。アヘン戦争の前と後、一つは、中国独自に、一つは「異文化との接触」のなかで書かれた二つのユートピア世界が、モアの『ユートピア』や『ガリバー旅行記』にもない女性解放をその大きなテーマとし、女の国まで到達したことはまことに興味深いことであって、中国のユートピアのもつユニークな性格であるといえるだろう。

## 出版文化の可能性

——貸本屋の機能を中心として——

ピーター・コーニッキー

昭和五十八年度の夏期講座の共通テーマに指定された異文化との接触というのは、まさに私の毎日経験していることである。その事実につけ込んで、全く関係のない講演をしてしまった。まずそれを許していただきたい。

出版史というのは、数年前から各国で盛んに研究さ

れるようになってきた。特に、七十年代に出たアイゼンスタイン氏の諸論文が各分野で論議を呼んだ。アイゼンスタイン氏は、写本時代と活字本時代とを比べて印刷発明による革新的変化（部数の増大、情報の統一等）を強調している。しかし、これに対して、出版文化を支える基盤の問題（経済発展、技術レベル、読み書き能力の普及等）を取り上げていないという指摘もあり、また貸本屋が大きな役割を果たしたといえる本の流布の段階を問題にしていけないという欠点もある。

日本の場合も、このような問題を考える必要があると言わなければならない。昔からあった木版による印刷の技術が、十六世紀末から急に活発な出版活動を生み出すようになったのは、出版文化の基盤がすでに存在していたことを示唆しているし、江戸時代の出版物の流布についても、構演の主題にした貸本屋が果たした役割も、当然問題にしなければならない。

ヨーロッパも日本も、十八、十九世紀が貸本屋の最盛期であった。ヨーロッパの場合は、貸本屋が出した目録や地方新聞の広告欄をたどってみれば、貸本屋の活躍ぶりが把握できる。しかし、江戸時代の日本の貸本屋は、新聞広告は勿論、目録も出していない。川柳などから判断すると、元禄年間に貸本制度がすでに三都にあったことはほぼ確定であるが、貸本屋の商印が

押してある現存する貸本自体の方が、貸本屋の諸相を調べるにあたって役に立つ。

結論に入る前に、いくつかの貸本屋のラベルや商印を紹介して解説した。それらは、江戸時代の後半に、書物が商品化して、庶民むきの商品と一緒に並ぶようになっていったことを物語ると同時に、貸本屋が通俗小説も啓蒙的な書物も扱いながら、ほぼ全国的なネットワークを形成していったことを明らかにする。それと関連する年代の問題にも触れたが、天保年間までに出版都市としての中央（三都と名古屋）と地方とを結び貸本屋ネットワークができ、またそれを通して読者層が全国的規模に発展していたのではないか、という推測をもって結論とした。

講演では、例を並べすぎ、十分要領を得ていなかったのではないかと反省している次第である。



## シベリアの旅

吉田 光邦

近世はじめてシベリアを横断したのは、カムチャツカに漂着して、モスクワへ送られ、一七〇五年から日本語の教師となった伝兵衛であろう。その後も日本語の教師として漂流民がペテルブルグやモスクワにまで旅した者には、サニマ、ソーゾー、ゴンゾーがいる。

ついで南部の竹内徳兵衛ら十六人がイルクーツクにあり、さらに有名な伊勢の漂流民大黒屋光大夫一行は、嚴冬のシベリアを横断した。すべてそのの旅行、ところどころに官設の駅舎があり、馬をとりかえている。一行は、ロシアで手厚く待遇され、十年を経て帰国した。明治になって最初に単身でシベリアを横断したのは、金沢の人、嵯峨寿安である。彼はロシア留学を藩から命ぜられ、約一年余を費して明治四年モスクワへ入った。彼は滞在すること三年、岩倉使節に同行して帰国した。

明治十一年、ロシアの特命全權公使だった榎本武揚はシベリア經由で帰国した。同行者に通訳市川文吉がいた。彼は幕府が派遣したロシア留学生の一人である。榎本の日記は当時のシベリアの旅の実態を伝えて詳

細である。旅は汽車、船便、それに馬車を織りませるものだったが大部分は馬車である。馬車はタランタスといひ一輛二人乗、四頭立て買ひとり制であった。榎本は各地の鉾山、工場などを見学しつつ東に向う。途中シベリア送りの流刑囚をしばしば見た。ウラジオに着いたのは、約二カ月後の九月末であった。

榎本につぐのは陸軍の福島安正の単騎旅行であった。彼のコースの前半は、ほぼ榎本と同じである。行程は一万四千キロ、出発は明治二五年二月である。福島はシベリアの各地に駐在する騎兵軍団に歓迎された。それは陸軍士官がエリートであった時代をそのまま反映する。福島は途中で外モンゴルに入るが、それもロシア側の好意によってである。彼はモンゴルの旅には苦しみ、早くロシア領へ入ることを望んだ。時代はまだ冒険に突進する英雄を讚美するロマンチズムにみまぎっていた。

福島とは同じコースを、同じ年に東から西へベルリンをめざしたのは山口の人、玉井喜作である。彼は隊商に加わって嚴寒のなかをそりで旅行した。彼も多くの流刑囚とすれちがっている。

やがてシベリア鉄道が開通すると多くの旅人は汽車の窓とわずかの駅のみ、シベリアと接触することになった。多くの日本人がヨーロッパへ往復の途次、シベリア鉄道に乗り、その印象を記録した。しかしそれは福島らとはちがった質の経験となった。そして今日

のわたしどもは、ただその空を飛び去ってゆくのみである。

### 開所記念公開講演会（一九八三年度）

八三年一月一日  
於本館大会議室

## 黒船再考

——文化的相互誤解の効用——

園田英弘

嘉永六年（一八三五）のペリー来航による、所謂「黒船ショック」は、鎖国政策の放棄をもたらしたばかりでなく、その後の日本人の西洋認識をも強く規定することになった。二隻の蒸気船を含め、合計四隻からなる「黒船」は、たんなる軍事的脅威であるばかりではなく、既に完成された「文明国」と「非文明国」

の富・力の落差の象徴として理解されたのである。「浮ぶ海城」のような巨姿の威圧感、「神速自在」の運動能力への恐れは、「祖法」としての鎖国政策を守り通そうとする幕府の氣力を喪失させるのに十分であった。かくして、対米あるいは対西洋一般とどのような関係を結ぶかを問わず、まず日本人に課せられた目標とは、この巨大な歴史的發達段階の落差を一步でも、二歩でも埋めることになったのである。

ところで、このような「黒船ショック」史観は、ペリーの率いた蒸気船の存在によってもたらされたものであったが、その実体はどのようなものであったであろうか。イギリスとアメリカは、一九世紀蒸気船發達史におけるライバルであったが、この両雄の蒸気船軍艦への取り組み方は対極的なものであった。イギリスは蒸気船軍艦に、アメリカは蒸気船軍艦の開發に力点を置いてきた。軍艦としての存在意義は、いうまでもなく大量の強力な武器を積載した、航続距離・スピードの優れたものであるか否かにかかっている。ところが一九世紀前半の蒸気船全般の性能からいって、強力な武器の積載と運動能力の両立は、不可能であった。イギリスは、したがって武力を重視し、蒸気力は港内での移動や、無風時に用いるぐらいの「補助動力」として位置づけた。一八五〇年代に至るまで、イギリス

海軍の蒸気船軍艦の大半は、帆船の軍艦を改造したものであった。

一方、アメリカ海軍は、武力の側面を最少限にし、航続距離を重視した。イギリスと異なり、世界の各地に植民地をもっていたわけではないアメリカとしては、蒸気力による長距離の自力航行の重視はやむをえぬ選択であった。この結果、浦賀に来たペリーの旗艦サスケハナ号（二四五〇ト）はわずか九門の大砲を備えていたにすぎなかった。これに対して、弘化三年に同じく浦賀に来たアメリカ海軍のコロンブス号はサスケハナ号とほぼ同じトン数であったが、八四門の大砲を載せていたし、五〇年代に蒸気船化されたイギリス海軍の二五〇トクラスのものも、やはり八〇門近くの大砲を積載していた。浦賀に来た他の二隻のアメリカ海軍の蒸気船も、ミシシッピー号一二門、ポーハタン号九門しかもたず、浦賀沖の「黒船」の軍事的脅威は、心理的には別として、たいしたものではなかった。

では、アメリカ海軍が重視した航続距離はどうであろうか。浦賀奉行所に、サスケハンナ号の士官はカリフォルニアから日本まで一九日で来ることができると述べたが、これが全くの希望的意見であることは言うまでもない。アメリカ東海岸のノーフォーク港を出て喜望峰回りで、ミシシッピー号は二六六日かかって浦賀

まで来た。石炭の積み込みその他を除き、純航行日だけでも一二五日はかかっている。このうち蒸気力を使用しているのは五割に満たないのは確実である。この時期、帆走だけでもチャイナ・ティー・クリップパーはほぼ同距離を一〇〇日以内で走っているのだから、ペリー自慢の「黒船」も、航洋性能についてはまだまだというものであった。蒸気客船が大西洋を安定的に就航するようになったのは一八四〇年代の後半である。少数の客と郵便物しか載せなかった大西洋横断の航路においても、ようやく蒸気船が蒸気力だけによって航行できるようになったのが、ペリー来航時の実体であった。陸戦隊、航走時の用員など三〇〇人を越す多数の人員を載せ、かつ蒸気力だけで大西洋を横断することすらおよびもつかなかった。

結論を述べよう。ペリーの率いた「黒船」は、帆船海軍から蒸気船海軍への過渡期のものであった。イギリスの海軍史家ルイスは、『変革期の海軍』の中で、過去と決定的に異なる蒸気船海軍が成立したのは、一八六〇年代になってからだと指摘している。これは、歴史家の指摘としては全く正しい。しかし、嘉永六年浦賀沖で対峙したペリーと日本の憂国の士たちの解釈は異なっていた。ペリー自身、自分の蒸気船海軍は完成の域にあるものだと思っていた。そして、その自信

と、はじめて目にする「黒船」の巨姿に圧倒された武士たちは、一部は打ちのめされ、一部は絶望的反発に突進することになるのである。

「アメリカ蒸気船海軍の父」ペリーは、文明の象徴である蒸気船の力を過信していたが、蒸気船についてのわずかの情報しかもたない武士たちの前には、蒸気船の威圧効果は絶大であった。一八五三年当時、アメリカ海軍は一〇〇t以上の蒸気船軍艦をわずか七隻もっているだけであった。ペリーはこのうち最初は五隻を日本遠征に率いるつもりであったが、整備の不良などで三隻しか参加することができなかった。ペリー艦隊は東インド艦隊という正式名称をもっているが、その実は、蒸気船軍艦に関するかぎり、アメリカ海軍そのものであった。ペリーの蒸気船軍艦を率いた、背のびした大見得は、日本側が「黒船」の脅威に過剰に反応することによって、歴史的な大事件としての地位を留めることになったのである。



## 国共合作の崩壊と汪精衛

狭間直樹

一九二六年なかばから翌春にかけて展開された北伐は、その破竹の進撃のゆえに全世界の耳目をそばたせる大事件だった。その勝利は国共合作の成立なしにはありえなかったのだが、しかしこの輝かしい合作は半途にして崩壊してしまった。二七年四月にはまず蒋介石らの右派が「清共」にふみきり、ついで七月に汪精衛らの左派も「分共」の道をえらんだのである。

四月から七月にかけての三ヶ月間、汪らの武漢政府は、北伐の本来の敵であった北京政府と、かつての味方、蔣らの南京政府の双方を対手としながら、さらに武漢内部における「分共」を断行した。汪はその口実をコミンテルンの緊急訓令、いわゆるスターリンのロイ宛密電の陰謀性にもとめ、これ以上合作をつづければ、国民党が共産党にとられる、とした。

ロイ宛密電は、原文が公表されなためおおくの臆測をよんでいるものだが、七・一八中国国民党政治委員会主席団報告「容共政策之最近経過」(A)、七月下

旬に出されたとおもわれる中国共産党の「国民党分共政策之真相」(B)および八・一スターリン演説(C)をつきあわすことにより、もとのものに迫ることができ。とおく、異説中でもっとも重要なものは、地主の土地没収の必要性の指令のなかに、中小地主をふくんでいたかどうか、であるが、Bからして小地主の没収は提起されず、中地主も留保つきであった、と判断できる。AとCが無限定であるかにのべるのは、前者が分裂にふみきろうとするかぎり当然の措辞であることは肯なえるし、後者はモスクワにおけるトロツキーとの対立を考慮すれば容易に理解できることなのである。

ところで汪はなぜ分裂にふみきったのか。当時、汪は武漢国民党と国民政府のあらゆる要職をほとんど一人占めにした存在だった。しかも党の正統性はいまでもなく武漢の側にあつた。その汪が共産党と合作をつづける国民党左派の最高指揮者としてえがいていた未来図は、反帝の旗のもとにすべての民衆を團結させ、国家資本主義の新体制、換言すれば民生主義の国家をうちたてそのさきに大同社会を建設する、というものであった。この青写真は清末に孫文によって提出されていらい、中国の革命家たちがかかげつづけてきた中国のブルジョア社会主義の旗だった。しかもこの旗は、南京との対立によりますますその色彩を鮮明にしてい

た(二七年八月以後に編集刊行された汪の文集には改竄がくわえられているので要注意である)。いまや武漢の左派はその未来図の実現に着手しうるかにみえたのだが、すべての民衆の團結を現実のものとする事ができるはずもなく、くわえて軍事的経済的圧迫にせまられ、分共の形をとった合作の崩壊にふみきらざるをえなかつたのである。

## イエスにおける二つの死

——受難伝承の構成論理——

谷 泰

受難伝承は、一つの歴史的出来事の記述であると同時に、キリスト教の秘儀的救済装置であるミサ儀礼の効果に根拠を与えるものとしての働きをなすという点で、たんなる歴史的叙述文以上の意味をもつ。いま歴史的叙述文がなぜこのような秘儀的メッセーヂを産出しうるかという問いに答えることはさておき、この受難伝承の記述をみると、そこにはいかにもナチュラルな歴史上の出来事とは思えぬ出来事記述、そして福音書記者の意図的附加やアレンドと思える部分が見

出せる。しかも受難の出来事は、「聖書の言葉」が成就されるように生起しなくてはならぬという、命令的とも云える指示に従って出来事はおこされて、その命令に支配されているのはイエスだけでなく、死後、屍の処理にあたる兵士にまで及んでいる。「聖書の言葉」といわれているものは、それは、旧約の過越し儀礼を中心とした、犠牲儀礼の範型のものである。

イエスの最後の晩餐に先んじて、イエスは塗油をうける。そしてユダが杯を同じくしてイエスに接触する。そしてイエスが象徴的に自らを裂くことで死ぬ。最後の晩餐への参加は贖罪効果をもつとされる。その後イエスの現実死つまり、逮捕と殺害の物語りが始まるが、イエスはまず不眠を命ずる。そしてユダが接吻を通じてイエスに再び接触する。イエスの現実死はそれに続くイエス側のイニシヤティヴになる象徴死と、ユダヤ祭司長側のイニシヤティヴになる現実死という二つの死にむかう出来事の流れが、前後しつつ対抗して記されているが、そのいずれもが、犠牲儀礼の範型にそって生起している。ユダの杯を通じた接触と、接吻を通じての接触との物語りには、不自然な関係がある。この対抗的並行性は、意図的アレンヂとみなされる。マルコの意図的アレンヂとして、この構成の意図はなにか。対立する二グループ、イエス側とユダヤ側の同一範

型にそった記述は、しかも両義的通謀者ユダの接触役の重複という点で結ばれながら、最後の晩餐でのヴィクトイム・イエスがそれを裂くという二重役割担当で対立した方向でむかい合っている。平行性を強調しつつ、現実死に先んじて自らの殺害のイニシヤティヴをユダヤ側から奪取する。しかも形式的にはユダヤ側の儀礼範型に忠実にそいつつ自らの死への道行きを演じて殺害のイニシヤティヴをとる。そこに自害の政治学、そして相手と同じことをすることで、相手をディレンマに陥しこむディレンマへの手法の表現がみとれる。旧約「聖書の言葉」という救済保証の範型に従いつつ、自己の側にその秘儀的効力を奪取する。物語り発話の中にこういう構成を埋めこむことで、それは物語る以上の行為遂行的発話となっている。イエスにおける二つの死の物語りを特異な対立平行性をもつように埋めこむことで受難伝承はこういう効力をえているのである。



## 本のうわさ

### 川勝義雄『六朝貴族制社会の研究』

(A5判、四三五頁、岩波書店)



著者川勝さんは、日本における中国中世史研究者グループの指導者の一人である。このグループは、安易にもしくは無理やりにマルクスの時代区分を中国史にもちこんださまざまな歴史家とは違って、中国中世を貴族制の時代と考えると、いう立場を共通の諒解としてもったうえで、極めて良質な中国史研究を共同で築き上げてきた。このグループはいままで中国史研究の上で世界のトップ・クラスの学派、そしてまさに「日本学派」と呼んでいい特色ある学派をつくりあげたといえる。

このグループのグループとしての成果は一九七〇年に『中国中世研究』という題で東海大学出版会から刊行されたが、『六朝貴族制社会の研究』の方は、そのグルー

プのリーダーである川勝さんのレパートリーの独演会的発表の場であるといえる。この書物の内容は標題からもうかがえるように六朝貴族制社会の形成から没落までを刻明に追究した文字どおりの社会史的研究であり、それゆえ実にみずみずしく具体的な歴史叙述に充ちており、読む者を十分に楽しませてくれる。よほど文献を博搜し、かつ読みこなせなければできない業ではなからう。ところで社会史といってもこの書の場合には近頃はやりの社会風俗史といったものでは全然ない。この書の場合にはまさに歴史叙述の原点としての社会史であり、社会構造史、経済史、政治史、思想史の基礎をなし、直ちにそれら諸領域とつながることの可能な意味での社会史である。

評者は中国史の専門家ではないから本書に対する専門的な批評を加えることはできない。しかし中国史一般、特に中国思想史一般に対しては特別な関心を持ち続けてきた。評者は中国史の時代区分に関して、マルクス主義的区分を適用するのは無意味だと考える。しかし、京都学派、いや評者の新造語では日本学派の区分に全面的に与みするものでもない。つまり漢末までを古代、六朝隋唐といった貴族制の時代を中世、宋以後つまり貴族制が崩壊した後の時代を近世とする説は、確かに様式史的に見れば中国史の変遷にきわめてすなおに密着した説であって好ましい。しかしそうした時代区分は形態学的(morphological)に過ぎる。評者は中国史を形態学的に三分するのは御自由だと思いが、その私有か共有かといった世界史の骨格的構造において中国史はのっぺらぼうだと考える。すなわちヨーロッパではローマ法の下で私有が確立したし、中世でもゲルマンの騎士たちは私的な城に拠って自らの私的領地を死守したし、フランス革命後ではナポレオン法典によって私有制が保障された。しかし中国ではそうしたことが一度もおこなわれなかった。つま

り中国史は終始一貫、公の原理で貫かれて  
いるのである。実際、中国中世の貴族制も、  
上からは天子による公地主義、下からは民  
間レヴェルにおける共財主義でサンドイッ  
チ状にはさまれているのであり、中国近世  
はそうした貴族制が官僚制によってとって  
かわられるだけだと思われる。しかしそう  
した中国の歴史と違って、日本の歴史は鎌

上田 篤・多田道太郎・中岡義介編

## 『空間の原型―すまいにおける聖の比較文化』

(B6判、XII四六八頁、用語索引付、筑摩書房)

パリで一年半程アパート暮らしをした。妻  
と共に最初にしたことは、板間の各部屋に  
絨毯などを敷くこと、居間用、台所用など  
と別々のスリッパを何足か揃えることであ  
った。ある日、フランス人家主がやって来  
た。玄関口で靴を脱いでもらうことを一瞬  
躊躇した。彼は土足のまま上り込み、居間  
のイスに腰かけた。あのパリの街路、犬の  
糞が撤き散らされた、カニネット(caninet)

倉の武家政権以後、公の原理を捨て、私の  
原理を自前でつくりあげたといえよう。

評者の勝手な歴史観をつい披露してしま  
った形になったが、そうした歴史観が妥当  
かどうか、中国史研究の現場で今後検討し  
ていただければ評者として甚だ幸いである。

(山下正男)

なるくそ取りオートバイまでが最近走らね  
ばならない、あの街路を歩いてきた靴が目  
の前にあった。

さて、本書は、人文研において一九七九  
年九月より一九八一年八月まで開かれた  
「住居における聖なる空間の比較研究」班  
の研究報告である。序説を含め二六篇の論  
文よりなる。対象となった「空間」は床の  
間から都市まで。多くは日本のすまい、祭

祀―芸能空間を扱うが、時に十二世紀西歐  
の修道院プラン、またポンペイの中庭、中  
国の華表に及ぶ。それらをつなぐのは、何  
らかの理念を表象する場であり、マクロコ  
スモスを代理提示するミクロコスモスであ  
るといふ共通性であろう。ヒトは、空間を  
さまざまに切り取り、そこを「スム」「マ  
ツル」「カザル」「ツクル」といった行動  
の場としてきた。こうして切り取られた  
「空間」の特性を十二に分類し、それらを  
「空間の原型」として論じたのがこの論文  
集である。「原型」にはもう一つの意味が  
籠められているようである。「原初のイメ  
ージを再現する場」副題が暗示する「聖」  
―空間がそれである。空間を区切るという  
行為と、その結果区切られた存在は共に何  
らかの聖性を帯びたものとなる。ここで、  
〈結果少〉というものとサンスクリットに起源  
をもつ漢訳仏教語が、聖空間の分節構造を  
明瞭に概念化するのに有効なものとなる。  
論集中の幾篇かが〈結果少〉に言及することか  
らもそのことがわかる。〈結果少〉は排除と結  
合の仕切線なのである。その意味で〈結果少〉  
は単にひとつのサブテーマにとどまること  
のない「空間の原型」を語る上でのより高

位の重要な概念であったはずであり、この点さらにつこんだ議論が欲しかった気もする。ともあれ、各篇ともにわが身のまわりに改めて目をやることを教えてくれた好篇であった。

さて、冒頭の経験談。「上下足分離」の

### 荒井 健『秋風鬼雨―詩に呪われた詩人たち』

(B6判、二九〇頁、筑摩書房)

生活様式と「高さの異なる床ごとに不可侵ともいふべき属性が存在する」という空間意識が日本人に特徴的にある(中岡)という、その標本を挙げただけのことである。

(赤松明彦)

中国詩に関わる十篇の詩論、詩人論を収める。初出年代は一九五五年から七六年にかけての二十余年間に及ぶ。対象への深い愛着と学問的な蘊蓄とが、長い年月をかけて熟成して来た芳醇な美酒のように、固有の香気を放っている。書名は李賀の「感諷」から取られた。「亡霊のむせび泣きは雨となり」というよりも、「ものめく雨」とする方が、「原義に忠実かもしれない」(あとがき)とのことであるが、この詩的な表現には、著者の文学観が端的にこめられていたようだ。これを補強する副題へ詩に呪われた詩人たちは、私などにはヴェル

レーヌが一八八四年に公刊した詩人論『呪われた詩人たち』を彷彿とさせるが、同じくあとがきの説明によれば中国詩のコンテクトでは、杜甫が李白を思っ歌った詩「天末に李白を憶う」の一句「文章は命の達するを憎む」を、ふまえているという。

巻頭論文「詩と中国」は、「詩経」から毛沢東にいたる中国詩数千年の雄大な流れを、詩の効用ないし詩人の社会的地位といったひとつの明確な視点から、一望のもとに明示して壯観である。「真正の詩人意識はつねに社会からはみ出していたし(中略)、絶対にはみ出しを許さぬ社会は真正の

詩が死滅して巨大な無菌病棟と化している」という鋭い指摘は、李賀や李商隱など中晩唐期の「呪われた詩人たち」への著者の愛着が、単なる個人的な偏愛にとどまらず、現代中国のかかえる詩(文学)と現実との葛藤をも十分視野に収めた上での、確固とした審美眼、芸術観に基いたものであることを、如実に物語っている。荒井さんはこの論文を、「詩の効用を詩人が疑えば疑うほど唐代の抒情詩は深度を増して行った。魯迅が李賀を愛したのはよく分るのだが、魯迅が李賀を愛したのとはよく分るのだが、毛沢東が李賀を、李商隱を愛している(らしい)のはどういふことか見当もつかない。中国という国はよく分らぬことが多い」と結んでいるが、分らぬことを分らぬといいきるこのいさぎよさが、かえって思考の柔軟と興行きの深さとを生んでいるのだろう。

李賀、賈島、蘇東坡、黄山谷などの古典詩人、戴望舒なる近代詩人、宋代の詩論『滄浪詩話』などを、それぞれ自在に論じ分けた本書の全体を論評する能力はもとより、紙幅の余裕すらもはや恵まれてはいないが、全巻をつらぬく基本姿勢は、右の一点に十分つくざれているように思われる。

(宇佐美斉)

Peter F. Kornicki

『The Reform of Fiction in Meiji Japan』

(24cm × 16cm 133 pages Ithaca Press, London)

明治十年代に吹き荒れた諸物へ改良の風は、その後半になって遅まきながら文学を巻きこみ始めていた。本書は『小説改良論』の嚆矢である『小説神髓』とその実践作たる『当世書生気質』を、近世文学、とくに為永派人情本の改良として再検討し、その流れの中に硯友社文学を位置づけようとするものである。

逍遙にとつて、明治の新文学がめざすべき道は伝統文学の否定ではなく、その「改良進歩」にあった。それは「小説の主腦は人情なり」のことがどおり、勸懲の排斥にはなかつた。この人情本の官能主義だけを部分否定した新人情本路線が、硯友社の「ロマンティック・ステューデント・ノベル」に受け継がれ、『金色夜叉』に命脈を保っているものと著者は見る。

文学同好会としての硯友社の出自を反映して、文壇の動勢には超然、「我が道を行く」といった調子の『我楽多文庫』が、文芸批評欄を登場させ、戯作的小説を中絶させてゆく過程に、逍遙のインパクトを受け、た文学意識の目覚めが指摘されるという。そして同人たちの書簡や新聞への投書などの提出がそれを裏付ける。このあたり、習作をも含めた小説類の丁寧な読みと関連資料の精査は、門外不出で「幻の」という形容詞がつく手写本『我楽多文庫』を求め、著者の奮闘の裏話を思い起こさせる。いかにも研究者の喜びそうな『小説総論』のお筆先の世界の構築でなく、欠点を多くさらけ出しながらも、当時、より大きな影響力を持ったであろう『小説神髓』の実体を押さえたいこうとする著者の目的を、この姿勢は支えている。

最後に、地の文の増加に西洋文学の影響を指摘する点に関しては、小説改良における伝統文学外の要素として、もう少しつっこんだ議論が必要となろう。これについては翻訳小説の研究に向かう著者の動きがあり、期待される一点である。

(久保由美)



訂正

「人文」前号（二八号）二〇ページで上段九行目の平田昌司を福嶋正に。同一八行目の（学部助手）を（文学部教授）に。以上二箇所をお詫びとともに訂正いたします。

人のうごき

- 細川弘明氏を助手に採用（西洋部）。
- 赤松明彦氏を助手に採用（東方部）。
- 小野和子講師（東方部）は、助教授に昇任。
- 岩熊幸男助手（西洋部）は、六月一三日伊丹発、オックスフォード大学ベリオルカレッジで第六回中世論理学ヨーロッパシンポジウムに出席、コペンハーゲン大学でオランダの「中世精神」会議に出席し、ネイメーヘン大学、パリ国立図書館バイエルン州立図書館等で中世論理学の研究と資料収集を終え、九月六日帰国。
- 前川和也助教授（西洋部）は、七月二日伊丹発、ライデン大学アッシリア学研究所で第三〇回国際アッシリア学会出席、ケンブリッジ大学東洋学研究所で第二回シュメール農業研究グループ集會に出席報告し、大英博物館近東古物部で当博物館所蔵の楔形文書の研究を終え、七月二六日帰国。
- 谷 泰教授（西洋部）は、八月一四日伊丹発、カナダのケベックで国際人類学

- 民族学会（フェーズI）に出席、ブリティッシュコロンビア大学で同民族学会（フェーズII）に出席し、同二八日に帰国。
- 宇佐美斉助教授（西洋部）は、八月五日伊丹発、スリジー・ラ・サル文化研究センターで「イヴ・ボヌフォワ」研究集會に出席し、パリ大学等でボードレール研究のための調査、資料収集を終え、九月二七日帰国。
- 小野和子助教授（東方部）は、八月二二日伊丹発、中国社会科学院近代史研究所西北大学、厦門大学等で東林党及び原始社会に関する資料収集を終え、九月二五日帰国。
- 村田裕子助手（東方部）は、九月五日伊丹発、瀋陽遼寧大学で東北作家研究に関する資料収集及び学術交流をし、五九年六月三〇日帰国予定。
- 桑山正進助教授、浜田正美、杉山正明助手（東方部）は、九月一日伊丹発、中国甘肅省博物館、敦煌文物研究所、新疆省博物館等で甘肅・新疆歴史文物の調査を終え、一〇月五日帰国。
- 宮崎法子助手（東方部）は、九月五日伊丹発、北京故宮博物院、北京中央美術学

- 院で中国絵画の調査及び資料を収集し、五九年二月二九日帰国。
- 天野史郎助手（西洋部）は、一九八一年一〇月五日より、パリ第三大学で研究中のところ、一九八三年一〇月一日一旦帰国、再度同年一〇月二〇日伊丹発、パリ第三大学、パリ国立図書館でマルセル・プルーストの草稿を研究し、オランダ国立美術館ハンブルグ装飾美術館等で資料収集し、一九八四年三月三一日帰国予定。
- 勝村哲也助教授（東方部）は、一〇月一〇日伊丹発、中国社会科学院で国際中文信息研究会に出席し、中国の研究者と意見交換し、同月一四日帰国。
- 浅田 彰助手（西洋部）は、一〇月二二日成田発、コロンビア大学で「経済学と記号論」に関するセミナーに参加し、同月三一日帰国。
- 山田慶児教授（東方部）は、一〇月二八日伊丹発、西安の中国科学技术史学会年會に出席して講演、上海で徐光啓逝世三五〇年記念学術討論会に出席、同月一一日帰国。

### 強靱なる体力と好奇心

——一九世紀

日本の情報と社会変動班——

班員はナント体力の要るものよ、そう思った。研究会に初めてフル参加した時のこと。四時をすぎ、焼肉をたいらげつつ議論に区切りをつけ、店を出たときの感想である。むろん朝の四時。

さまざまな情報網を駆使し、毎回必ず違った茶菓(等)が準備される。これも班員の情報ストックにより話題の俎上に載る。一瞬の休憩にも五分の情報。提示されるすべてに好奇の電波を投げ、貪欲に受信する。班員はなんたる好奇心のカタマリであることよ、もう一つの感想である。

毎回のあつまりは、まず外国人の日本見聞記紹介、ついで本報告、難陳、途中給油、議論、外出、正餐、再議論、さらに河岸をかえての情報交換・議論……とつづけられてきた。体力競争は本研究会の特色である(ナントこの点でも班長がトップを走る。よって冒頭から班員を長と読むベシ)。ウォーミングアップとしてはハードな見聞記紹介が、ほぼ百を越したのもむべなるかな。

さて当初から「情報」を抽象的に定義してかかる正

面戦ではなく、それぞれが持つ関心から自由にテーマを設定するという一見アナーキーな方法をとってきた。しかしそれはおのずと二つの関心を形成していった。一つは海外情報の摂取による社会変動。いま一つは国内における情報流通の進展と社会変動との相関である。そこで、汽車・汽船・電信などの交通、通信手段、公園・博覧会など情報流通と交換の場、新聞・教科書といった出版・活字メディアの発展と社会変動との相関がとりあげられた。その相関に一九世紀の特徴があるとすれば次のような見方が可能となる。

つまり一九世紀は、多様な伝達とフローおよびストックの技術の成立に支えられた情報によって、「情報環境」と呼べるものを生んだとする見方である。情報の一方的な社会変動力という考えに与せず、情報と社会変動班と名乗ってきたゆえんは、暦、節用集など、社会に一定の枠組を与え、安定したりサイクルを保証する情報ストックの類の安定化作用も視野に収められているからだ。こうした一九世紀の情報環境がもった多面的なちからに着目すれば「情報史観」も可能かも知れない。

ともあれ、一昨年の中間報告に続き、本年には最終報告がとりまとめの運びになっている。毎回の研究会で鍛えた班員の強靱なる体力と好奇心がものを言うときである。

(白幡洋三郎)

## 慈恩伝とウイグル仏教

——行歴僧伝にみえる

中央アジアとインド班——

慈恩伝を読み始めて、まもなく一年になるうとする。湖西線の景色にはいささか飽きてきたが、それも楽しいメンバーに会えると思えば何のことはない。

慈恩伝は最も多くの仏典を漢訳した玄奘の伝記であり、確かに大蔵経の中に入っているが、読んでみてとても仏典とは思えない。アジア仏教圏のどこかの国で、これをありがたいお経として読誦した所があったとは、今の我々には一寸信じられない。

ところで慈恩伝には古代チュルク（ウイグル）語訳がある。これは西ウイグル王国の首都であったビシュバリク（北庭）出身のシンコリセリ都統という僧が、恐らく一〇世紀末〜一一世紀前半に漢文から直接翻訳したものである。この人物は漢文に通じたウイグル人とみえることも出来るが、私の考えでは、ウイグル語に通じた漢人である。彼の中には、唐代以前から東部天山地方に根付いていた漢人仏教と、一〇世紀に敦煌や中原から入って来た新しい漢人仏教とが、混然一体となって流れていたのではないかと思われる。

ではこのような人物がなぜ慈恩伝のウイグル語訳を

行なったのか。もちろんそこには、九世紀後半の西ウイグル王国の成立によって、大量の漢人仏教徒がウイグル人の支配下に入ったという歴史的背景があったに違いない。王国形成以前はモンゴリアにいたウイグル人の多くはマニ教徒かシャーマニストかであった。それが王国成立からシンコリセリ都統登場までの約一世紀の間に、被支配者層の漢人やトカラ人の強い影響を受けて、かなりの速さで仏教徒化していったのである。ウイグル訳慈恩伝は、一方では情熱の求道者玄奘の姿を通じて新たに仏教徒となったウイグル人の信仰心をより一層あおる宗教書として、他方では中国・中央アジア・インドの地理・風俗に対する知的欲求を満たす娯楽教養の書として流布したのではなかったか。

しかし始めがそうであるからといって、最後までそうであるとは限らない。パリのギメ美術館に残るウイグル訳慈恩伝の古写本には後代の書き込みがあるが、それによるとどうやら一三世紀前後（書体や人名の特徴からそう判断する）のウイグル人仏教徒は、これがありがたいお経として読誦したようである。

手堅い実証的手法は確かに歴史学の基礎である。しかし行き詰まりを打破する爆発力には欠ける。時として「狂人的発想」を要求されること、これは分野のいかんを問わず、常に最先端を行く科学者の宿命ではなからうか。

（森安孝夫）

## 空間の世紀

——十八世紀

ヨーロッパの空間認識班——

モンテスキューにおける興味ぶかい点の一つは、そのヨーロッパ認識である。彼の思想は相対主義的で、そこからヨーロッパの相対化も生まれる。だがそれはけっして一義的ではなく、なお揺れ動くものをとどめている。「奴隸制」が手ごろな例となろう。

私たちが通常「奴隸制」とするものをモンテスキューは「残酷な奴隸制」とよぶが、それは「強制」にもとづく。「人間は平等のものとして生まれる」から、奴隸制は「本来的には自然に反していると言わねばならない」のだが、「暑さが肉体を消耗し、気力をあまりにはなはだしく弱める」ので、「懲罰の不安によってでなければ」、労働という「苦痛な義務」は強制しえない。したがって、「あまり理性に背反しない」し「自然的理由にもとずいている」とモンテスキューはいう。

以上の所論もフンギリが悪いが、しかも、右の「自然的理由」が存在する「地方と、幸運にもそれ〔奴隸制〕がすでに廃止されたヨーロッパのように、自然的理由自体がそれを排斥している地方とを、はっきりと

区別せねばならない。だから、奴隸制は、「地上の特定の地方に限定」され、「われわれの間」(ヨーロッパ)では「無用」である(以上、『法の精神』第五章第七、八章)。

「温暖」なクリマの恩恵による「自由」なヨーロッパというわけでもあるが、こうしたヨーロッパ認識に端的にあらわれているように、一八世紀ヨーロッパは《空間認識》における大きな変化を経験したと言えるのではないか。そこからこの共同研究のテーマが生まれてきた。

それは、大航海時代らしい進行してきた、いわゆるヨーロッパの拡大の過程で蓄積された量質ともに尨大な事実データをはじめて意識化することで可能となったものであった。その意味で一八世紀は《空間の世紀》ともよべようが、これをふまえることで一九世紀という歴史の世紀も成立しえたものではなかったか。

この《空間認識》は、自然的空間(航海術の進歩、地理学、博物学、人類学の発達など)、社会的空間(産業革命、都市・農村の変容、国民経済、国際経済の拡大など)、シンボリック思考的空間(旅行記、エキゾチスム、ユートピア文学など)に分けて考察することができよう。

「一八世紀ヨーロッパの空間認識」はこうしてとりあえず発足した。鬼がでるか蛇がでるか、楽しみであるとともに不安でもある。

(樋口 謹一)

# 旅

## 高昌故城にて

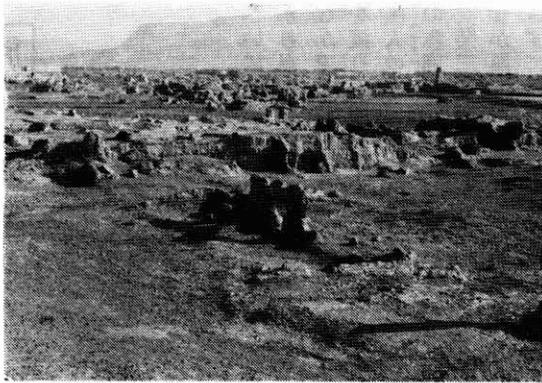
杉山正明

いにしえの高昌、現在のトゥルファンは、いまやすっかり日本独特の社会現象となった「シルク・ロード」のなかで、とびきりの観光名所である。玉門関をでて戈壁を渡り、地の底をくだると突然オアシスがあらわれる。漢人の王、魏伯雅・文泰父子が支配する高昌国には東西の隊商がゆきかい、国禁を犯して天竺へ求法の旅に出た玄奘三蔵が訪れる……（「シルク・ロード」は、なぜか漢代か唐代が多い）。これはもう、マスコミなどできずに繰り返される西域ロマンのきわめつけである。

シルク・ロードも、ヘレニズム・騎馬民族起源説などと同じような幻想だろうが、ともかく、一行十一人、昨年九月二五日トゥルファン駅について。さきの敦煌では次第にきつくなる乾燥とほこりのためか、あるいは二日間見学した莫高窟の重修によるあまりの厚化粧にあてられたのか、意気さかんとはいいかねた。ところが、トゥルファンに入ったとたん、空気は爽快、哈密瓜・種なし

ブドウなどの食べものはうまい、ホテル中庭で毎夜もよおされるウイグル男女の歌舞は素晴らしい。三泊ですっかり元気をとりもどした。中国入りしてから歌人に変身した本田団長の歌詠は冴えわたり、団員某氏はトゥルファン最後の晩、歌舞とび入りのもとめに敢然と応じ、吐魯番賓館のスターとなった。

交河故城、高昌故城、アスタナ古墳群、ベゼクリク千仏洞……。どれも風化・破壊の跡もそのままの姿が、よけい心を打った。とくに、町の東方五〇kmほどに累々と遺構を残す高昌故城は、かつてのトゥルファン盆地の繁栄の様子を無言のうちに語ってくれた。ここより東行して長安の都まで、たぶんこれ以上の巨城はないだろう。同心円状の三重の城壁は、どれも築に高さ一〇m以上はある。思わず、十三世紀後半、クビライ家と骨肉の争いを繰り返したチャガタイ家のドゥア・ブズマ兄弟が十二万の兵とともに元朝派のウイグル王家をここ哈刺火州の城に囲んだ時、ひとりのウイグル王女が講和の犠牲となつて籠に乗せられ城壁の上よりひきおろされたという有名な逸話が心に浮んだ。が、見学時間三〇分とあって、浜田正美氏と二人、遺構中央部にそびえる塔へ駆けた。十六世紀はじめ明朝に聖戦を挑んだチャガタイ裔の速達児が吊橋を懸けてその上に起居した土刺（蒙古語で塔）を見するためである。塔は崩壊がすすみ、はたしてそれか確証はなかった。しかし、塔の下から見渡すと、城外南方一面に実に緑色濃い畑地がひろがり、濃紺の空と



高昌故城

異様なコントラストを見せていた。往昔、隊商貿易と基地経済で現金が潤沢であったと思われる高昌では、ひょっとすると現在の都市近郊型のような農業が営まれていたのかも知れない。それにしても、明代に国境の国際貿易都市として栄えたといわれる肅州酒泉のあまりにみずぼらしい現状にひきかえ、高昌故城の優越は歴然としていた。敦煌―ハミ間の「沙河」をさかいに、東西は全く

別の世界であった。もし、祁連の山並みが作る帯状のオアシス群さえなければ、それはもっとくっきりと歴史に跡をとどめたであろうなどと幻想しつつ、急いでマイクロ・バスにもどった。

## パリの屋根裏部屋

岩熊 幸男

パリには予定より早く着いた。予約した宿には一週間待たねば入れない。安宿を探すには少し疲れ過ぎている。とりあえず一つ星ホテルにとびこんだが、長逗留するには少々高い。何となく気安くなったカストロ髯の従業員に、もっと安いホテルはないかときいてみたことから、一週間だけなら俺の所へ来ないかということになった。その間俺は恋人の所に泊る、格安にしとくと言う。このマダムには内緒だぜと念をおした。翌日、カストロ氏はまだ仕事があるので、その恋人に連れられて彼の部屋へ行く。彼女はオーストリア人でやはりホテルで働いているそうだ。ただしこちらは日本資本の大ホテルで主な客筋は日本人団体らしい。彼らの買物のすさまじさなどよく聞く話を聞いている内に到着した。

場所はサン・ジェルマン・デ・プレ、教会のすぐそばのたいへんな高級アパートで、巨大な扉を通って建物に入る。ただし彼の部屋はその中の典型的な屋根裏部屋だった。中庭の奥にある階段でまず地下に降り、真暗な地下室の奥に女中の上り降りする裏階段、もっとも今は超小型ながらエレベーターがついていてそれで最上階へ登

る。さらに廊下をうねうねといった奥に彼の部屋はあった。六畳位の広さ、ベッドに机に椅子二脚、水屋と隅の洗面台、ビデを改造した「シャワー室」、それですべてである。炊事は小型ガスバーナーがあつてそれで煮炊可。便所は廊下の隅の共有便所で、紙は用便のたびに持込みである。屋根の三分の一は斜めに切り込んでいて、そこに押出し窓がある。その窓から覗くと、内庭をはさんで向うの高級アパルトマンの室内がよく見える。廊下の窓からはごみごみしたパリの屋根並がずっと向うまで続いている。

私はおおいに気に入つてそこから一週間図書館に通つた。歩いて行ける距離である。ホテルのように出入りのたびに一々鍵を出してもらつて手間もいらぬ。ただ門番にできるだけ愛想よくにっこりしてみせる位である。できるならば予約した宿に移らずにそのままここに居続けたい位だった。それにしても彼等はどんな生活をしているのか。見知らぬ日本人に部屋を貸して小遣を稼ぐ。収入は折半だそう。彼の部屋には十歳位を先頭に三人の子供達の写真があつた。彼の子供達よと、かなり年のあいた彼の恋人は言った。彼はチリ人である。子供達はチリに置いてきているのであらう。パリに来てもう数年になると彼は言つていた。

### 東洋学文献センター講習会

○一九八三年度 第一三回漢籍担当職員講習会（漢籍電

算処理）

算理）

第一日（一〇月三日）

漢籍の電算化について（講義） 勝村 哲也

東洋学文献類目の編集とフォーマット（講義） 都築 澄子・志水喜久子

入力用資料作成（実習）

第二日（一〇月四日）

計算機入門（講義）

（豊田工業大教授） 北川 一

オンライン入力（講義）

（図書館情報大教授） 星野 聡

オンライン入力（実習）

第三日（一〇月五日）

計算機による漢字処理（講義）

（大型計算機センター助教） 島崎 真昭

入力実習

第四日（一〇月六日）

データベースについて（講義）

（大型計算機センター助手） 渡辺 豊英

大型計算機センター見学

ネットワークについて（講義）

(大型計算機センター講師) 飯田 記子

入力実習

第五日(一〇月七日)

大型計算機センターの役割(講演)

(大型計算機センター長 工学部教授) 丹羽 義次

質疑応答

学士院会員に選出

藪内 清 平岡武夫両名誉教授は日本学士院の新会員として選出された(八三年一月三日付)。

流沙海西掇学会賞

濱田正美氏は、第十六回流沙海西掇学会賞の受賞者の一人に選ばれた。本研究所では、第四回の前川和也、第五回の桑山正進、両氏に次ぎ三人目の受賞である。授賞の対象となつた *L'Histoire de Holon de Mahammad A'lam Zinbun*, vols 15, 16, 18 は、十九世紀後半の東トルキスタンの歴史事件を記した古典ウイグル語の一写本の、エディション・翻訳・注釈から成り、漢文資料の枠内に留まることの多かつた我国の東トルキスタン研究に新局面を拓いた点が評価された。

外国人特別招へい教授

○戴 逸 中国人民大学教授、清史研究所所長

中国近代化の研究

期間 一九八三年九月〜同年十二月 受入教官 狭間助教

招へい外国人学者

○郭 湖 生 南京工学院建築研究所副教授

中国・日本古代建築の比較研究

受入教官 山田教授

期間 一九八三年七月〜一九八四年二月

外国人研修員

○呉 豊 邦

孫文の革命運動と日本 指導教官 竹内教授

期間 一九八三年九月〜一九八四年八月

○Stephan J. Roddy プリンストン大学院生

儒林外史の研究 指導教官 竹内教授

期間 一九八三年九月〜一九八四年八月

○錢 立 方 ハーヴァード大学院生

中国六朝史 指導教官 吉川助教

期間 一九八三年一〇月～一九八四年六月

○Christine Mollier パリ第七大学院生

中国宗教の思想史 指導教官 麥谷助教

期間 一九八三年一〇月～一九八四年九月

○Mesnil Evelyne パリ第七大学院生

益州名画録の研究 指導教官 荒井教授

期間 一九八三年一〇月～一九八四年九月

○James V. Stokes ケンブリッジ大学院生

馬祖道一と洪州宗派 指導教官 柳田教授

期間 一九八三年二月～一九八四年一〇月

○Ronald W. Hadley シシガン大学院生

正法眼蔵の研究 指導教官 柳田教授

期間 一九八三年六月～同年一月

お客さま

○七月一三日

中国国务院教育部外事局総合処副処長

馬家驪

同右 外事局員

白剛

○九月二日～一二月六日

○九月一三日

中国人民大学哲学系副教授

中国国際交流協会訪日代表團

劉炎

李一氓

〃 理事

〃

〃

〃

○九月六日

東独フンボルト大学教授

R. Felber (費路)

○九月二七日

杭州大学地理系教授

陳橋驛

○九月二〇日

南開大学訪日代表團

南開大学校長兼經濟研究所長

南開大学外事處處長

〃 科長

〃 教授

○九月三〇日

第五次「中日友好學者訪日代表團」

中国社会科学院副院長

中日友好協會理事

中国社会科学院外事局アジア・アフリカ処処長

中国社会科学院哲学研究所研究員

中国社会科学院哲学研究所研究室主任

中国社会科学院歷史研究所研究員

中国社会科学院經濟研究所副研究員

張國維

齊一利

林利

田昌五

沈立人

区棠亮

趙安博

滕維藻

劉德有

滕維藻

陳橋驛

陳橋驛

陳橋驛

陳橋驛

滕維藻

逢誦豐

丁愛菊

揚志玖

揚志玖

揚志玖

蕭棟華

蕭棟華

蕭棟華

蕭棟華

蕭棟華

蕭棟華

蕭棟華

蕭棟華

蕭棟華

中国社会科学院「世界経済」雑誌常務副編集長

史敏

ソ連東欧研究所ソ連経済研究室主任

陸南泉

哲学研究所研究員

滕穎

中日友好協会理事

呉応健

中国社会科学院外事局アジア・アフリカ処幹部

現代国際関係研究所副所長

現代国際関係研究所東アジア研究室主任兼同研究所

副秘書長

厦門大学台湾研究所副所長

銘傳商專電子計算機科教授兼主任

ソ連科学アカデミー

中国社会科学学院研究員

北京文献服務処主任

中国科技研究所助理研究員

機械工業部自動化研究所研究員

石油工業研究所研究員

中国社会科学学院研究員

中国科技研究所助理研究員

機械工業部自動化研究所研究員

石油工業研究所研究員

〇一月一五日

中国社会科学院社会科学情報研究所研究員

呂志良

〇一月一七日

国立シンガポール大学図書館委員会会長

王祖望

コオ スオン スギー

〇一月二九日 中国社会科学院古典文学代表团

中国社会科学院文学研究所副所長

鄧紹基

外事局職員

解莉莉

範寧

研究員

外事局職員

解莉莉

〇一月二四日(月) 於本館大会議室

テーマ 十八世紀の都市化

コレージュ・ド・フランス教授

E・ハロウ・ラデリュー氏

人文科学研究所

関西フランス史研究会

共催

☆ ☆ ☆

講演

書いたもの一覽

一九八三年六月～一九八三年二月  
(五十音順、●印は単行本)



●赤松明彦

Shokavartika, anunnana 章の研究(1) (共訳)

インド思想史研究 二号 一〇月

東京デイズニールランドに行ったこと  
カオスモスをめぐるカオス

広告批評 一一月  
現代詩手帖 一一月

●浅田 彰

はじめにメディアありき

イコール 六月

本物の日本銀行券は贋物だった

ブルータス 六月一五日

リトゥルネッロ

P F 七月

書評・蓮實重彦『映画 誘惑のエクリチュール』

月刊ペン 七月

△場所Vと△交通V

TATA 七月

シューマンを弾くバルト

海 八月

討議・戦後生まれが目指す「わが未来」(土屋恵一郎・三田誠広と)

朝日ジャーナル 八月一二・一九日

東京デイズニールランドの象徴性

京都新聞 八月一九日

●構造と力

勁草書房 九月

公理主義的経済学の誕生(上)

人文学報 五五号 九月

戦争——至上の遊戯としての

月刊ペン 九月

隠喩としてのAIDS

イコール 一〇月

メディア系としての身体

イコール 一〇月

●飛鳥井 雅道

明治都市事始めのこと(対談・前田愛と)  
龍馬と陸奥宗光

歴史公論 六月号  
歴史読本 七月号

●新修大津市史6 現代(共編)

ナショナルリズム再検討のために(「日本人」復刻パンフ)

大津市役所 八月  
日本図書センター 九月

強靱な精神の記録(「へちまの花」復刻パンフ)

不二出版 一二月

●荒井 健

十三年目の病氣見舞

颯風 一六号 一一月

●井上 章 一

ファシズムの空間と象徴II——大東亜の新様式——

人文学報 五五号 九月

●上山 春平

生物社会学の世界

科学 九月

今西錦司・自然学の提唱のコメント

季刊人類学 九月

●高野山——弘法大師の信仰に生きる(共著)

講談社 一一月

●宇佐美 齊

「ニン」ということばについて 海 浪 五号 七月

翻訳・イヴ・マリ・アリュー

UN SPECTACLE AMUSANT ふらふらす 六月〜十一月

●梅原 郁

●建炎以来繫年要録人名索引 同朋舎 六月

塩の専売と中国社会 月刊百科 二四八 六月

歴史地理学(『アジア歴史研究入門』三) 同朋舎 十一月

宋代の救済制度(『都市の社会史』) ミネルヴァ書房 十一月

●小野 和子

女性史(『アジア歴史研究入門』三) 同朋舎 十一月

書評 中山義弘『近代中国における女性解放の思想と行

動』 中国研究所月報 一九八三年十一月号 十一月

●桑山 正進

ガンダール美術と遊牧族(一) オリエント通信 二〇号 一〇月

●佐々木 克

●水戸藩死事録・義烈伝纂稿(校訂・解題) 同朋舎 七月

錦絵と天皇 同朋六二 八月

榎本の自負と国際感覚(『榎本武揚』) 旺文社 九月

●阪上 孝

王権と家族の秩序——近代化と家族 思想 八月号

自主管理について考える 『社会運動』四二号 九月

ドミエ『蜂起』 読売新聞(夕刊) 一〇月二〇日

●園田 英弘

学歴社会・その日本の特質 教育社会学研究 三八 一〇月

榎本武揚と幕末の軍艦(『榎本武揚』) 旺文社 九月

Seventy-seven Keys to the civilization of Japan. (ed. by

Unesao Tadao) の近代の部分 十一月

●竹内 実

中国によみがえる孔子 世界と日本 七月一日

日中の架橋者・廖承志氏と方紀生氏のこと

鄧小平の中国 東京新聞 七月三、四日

政治的中国・文学的中国 徳島新聞 八月一九日

沙漠の白い頭蓋骨 京都新聞 九月六日

世界文学の新潮流・中国

読売新聞 九月二、三、四、二六日

昨日の中国文学・今日の中国文学 中国研究 一〇月号

孔子批判と孔子の生命力 問題と研究 一月号

嚴罰主義の中国 京都新聞 一〇月二九日

鄧小平は語る・小平文選の考察 東亜 十一月号

●小平は語る・小平文選(共訳) 風媒社 一〇月

●田中 淡

The Bell Tower and Drum Tower in the Ancient City

of China. 31th CISHAAN Abstract of papers II 八月

住まいにみる中国文化 太陽 一〇月号

中国建築史学向大家の著作集刊行始まる

建築史学 一号 一〇月

建築史学の日中友好

日中建築 一六号 一〇月

昆明圓通寺の碑文と建築・池苑

佛教藝術 一五一号 一一月

中国の伝統的木造建築

建築雑誌 一一月号

日本建築の源流をたずねて(座談)

建築雑誌 一二月号

●多田 道太郎

都と自然と工芸と

集英社刊・日本の技 六月

健康づくり(三一八)

共同通信社 六月〜一二月

潮音風声(一一二二)

読売新聞 七月〜一二月

現代贈答考

朝日新聞 七月

のれん

朝日新聞 七月

解説・富岡多恵子著『英会話情報』

集英社 九月

●角山 栄

時計のファッション化

サンケイ新聞 六月六日

砂糖と食生活革命

『週刊朝日百科・世界の食べもの』一三〇号 六月一九日

時計とくらし

『南海道とところどころ、姿と心』南海道総合研究所 六月

手食からナイフ、フォークへ

『週刊朝日百科・世界の食べもの』一三六号 七月三十一日

光栄の博覧会大道——十九世紀英国人民的生活与風俗——

『倫敦科学博物館』(世界博物館8)

出版家文化事業股份有限公司 中華民國 七月

情報戦略が経済大國・日本を作った

Voice 九月

書評・田代和生著『書き替えられた国書』

日本経済新聞 九月四日

和歌山の文化を考える——和歌山のもつ主体的条件——

『空港・産業・企業と地域社会』南海道総合研究所 九月

ある教え子からの航空便

月刊健康 一〇月

比較社会史の試み

経済評論 一〇月

●編・マイクロフィルム版・領事報告資料・七五リール

雄松堂フィルム出版 一〇月

解説・領事報告資料(『領事報告資料収録目録』)

雄松堂フィルム出版 一〇月

●富谷 至

謀反——秦漢刑罰思想の展開 東洋史研究 四二卷一号 六月

翻訳・傅天仇「中国彫塑の長河」(『中国美術史談義』)

淡交社 六月

●礪波 護

隋唐(『アジア歴史研究入門』一)

同朋舎 一二月

●中村 賢二郎

都市の社会史(編)

ミネルヴァ書房 一二月

●宗教改革と都市(共編)

刀水書房 一二月

●狭間 直樹

辛亥期の「新しい女性」——尹銳志の場合——

東亜 八月

(現代中国における辛亥革命研究・九)

野沢豊氏の批判に答える——五四運動における上海の罷

工闘争の評価をめぐって——近きに在りて 第四号 九月

近代(一) 『アジア歴史研究入門』(一)

同朋舎出版 一一月

●ピーター・コーニツキー

探検家ノルデンシヨールド「近代化明治」解す

京都新聞 六月二四日

書評・R. I. Danly 著『The Life and Writings of Higuchi Ichijō』 Journal of Japanese Studies

九卷二号 七月

●平田昌司

京都の貸本屋のいくつか 京古本や往来 二二号 一〇月

●藤井讓治

呉語帮端母古読考(上) 均社論叢 一四 一一月

●小浜市史・藩政史料編一(共編著)

小浜市教育委員会 七月

●京都町触集成・第一卷(共編)

岩波書店 一〇月

●敦賀市史・史料編第四卷下(共編著)

敦賀市 一〇月

●古屋哲夫

書評と紹介・栄沢幸二著『日本のファシズム』 日本史研究 八月

書評と紹介・伊藤隆著『昭和十年代史断章』

日本歴史 九月

資料と研究のあいだ

みすず 八・九月

初期官報の海外情報

図書 一一月

●前川和也

“The Management of Fatted Sheep (udu-niga) in Ur III Girsu/Lagash,” *Acta Sumerologica* 5 (1983), pp. 81-111 (Hiroshima)

●矢淵孝良

翻訳・王家樹「和氏の璧・王名人」(『中国美術史談義』)

淡交社 六月

訳注・張猛龍碑ほか(『中国碑帖選』中)

玉林堂 六月

書評・小西昇『漢代楽府謝靈運詩論集』

中国文学報 三五冊 一〇月

●柳田聖山

今月のことば 花園 六月一一月

禅語コーナー 花園 六月一一月

横超仏教学の出世本懐——『涅槃経と浄土教』書評——

仏教学セミナー 三七号 五月

道元の恋歌 (中公パックス「道元」七、八月報) 八月

夢蘭の名(劇団くるみ座公演、花と風狂に寄せる) 九月

禅語の秋、鎮州に大蘿蔔頭を出す 清泉一二号 一〇月

夜明けの心・花のいのち (名著出版、『珠玉人生法語集』) 一〇月

『宝林伝・伝灯玉英集』(増訂版) 中文出版社 一〇月

チンソウとチンソウ、公卿と公卿、坐禅と座禅、相国寺、

建仁寺 夕刊読売新聞(宗教) 七月一一月

The Li-tai fa-pao chi and Ch'an Doctrine of Sudden

Awakening The "Recorded Sayings" Texts of

Chinese Ch'an Buddhism

(Early Ch'an in China and Tibet) Berkeley Buddhist

Studies Series, Asian Humanities Press

十一月

平凡社 八月・九月・一〇月

筑摩書房 一〇月

『史記』の魅力 国語通信 二五九

思想史——魏晉と隋唐—— 『アジア歴史研究入門』(二)

同朋舎 十一月

●吉田光邦

叢竹居日曆抄

産業社会の構造

インダストリアルデザインと技術史

祇園祭と王芸

唐崎の松

婦人之友 六月

情報 七月

精緻の構造 七月

文化財報 八月

大津市史月報 八月

●武田二百年史(共編著)

オアシスの樹

Foreign Images of Japan (2)

神屋宗湛

東は東・西は西

歴史のなかの産業空間

万国博のこと

此書さまざま

やまとの文庫

技術史の周辺

Sumitomo Quarterly 九月

MOA 一〇月

日本及日本人 一〇月

まちなみ 一〇月

岡田章雄著作集 月報 一〇月

染織α 六〇一一月

天理時報 六〇一一月

三省堂ブックレット 六〇一〇月

●山田慶児

空想のなかの自叙伝(朝永振一郎著作集12

『紀行と閑談』月報)

みず書房 九月

●山下正男

火と自然哲学——ヘラクレイトスの「火」を中心に——

15 二一号 六月

義務論理学の哲学的意味

人文学報 五五号 九月

●論理学史(岩波全書 三三五)

●山本有造

内ニ紙幣アリ外ニ墨銀アリ

人文学報 五五号 九月

大限財政期の通貨構造——

歴史学——外国からみた日本(談)

初のバリ駐在外交官 鯨島尚信の面影

京都新聞 六月一二日

●吉川忠夫

道教の旅(上)・(中)・(下)

毎日新聞 七月一八日

月刊百科 二五〇、二五一、二五二

人

文

第二九号

昭和五十九年三月二十五日

京都大学人文科学研究所発行

中西印刷

非売品